



大島歯科診療所の玄関（2007年9月1日・撮影）

『宗像・大島歯科診療所』

〜4年間の実践録〜

奮ふん島とう記き

歯科医師・精神対話士 小川智也

「トゥルルルル トゥルルルル トゥルルル……。」

2004年の夏を間近に迎えた季節のある土曜日の朝、当時大学病院に勤めていた為、その日は休日でもゆっくり昼前まで寝ているつもりでいた自分を、普段はあまり鳴らない携帯電話の着信音が僕を叩き起こした。

「もしもし。加来ですが、おはようございます。朝早くすみません。今、大丈夫ですか？」

電話の主は香織さんだった。

香織さんは、自分が当時大学病院に勤務しつとも週に一回アルバイトとして勤めさせて頂き、大変お世話になってる加来歯科医院の院長先生の奥さんだ。

「なんだろう？」と、思いつつも返事をする。

「はい。大丈夫ですが、どうしたんですか？」

「実は昨日、院長（注1・加来歯科医院院長の加来千里先生）と牧野先生（注2・私と同期の牧野正敬先生。熊本で代々歯科医師の家系で4代目）と一緒に飲んでい

てですね、二人で勝手に盛り上がって、院長が、小川先生の今週の診療を見て『俺は腹を決めた。俺は小川と一緒にやる。小川を来年からパートナーとして迎え、宗像の大島に歯科診療所を開設する』と言い出したんですよ。小川先生を抜きに、そんな勝手に話を進めて良いわけないと私は思うし、小川先生の意見、意向を聞くように院

長からも頼まれましたので、お電話しました。もし先生が良ければ来年うちに就職しませんか？」

あまりに突然すぎる内容の電話で大変驚いたが、加来歯科医院でのアルバイトは一年契約であり、来年からは大学の野球部のOBの先生のところでお世話になろうかと、ただ漠然と考えていただけで、何も決めていなかった。そんな自分としてみたら、このお誘いはすごく嬉しいことであつたし、院長先生も、診療がうまく出来ない自分に親身になってアドバイスを下さる『患者さん思い』の素晴らしい先生なので、緊張しつとも毎週水曜日の加来歯科医院での勤務は楽しみでもあつた。

もう少し加来先生の傍でお世話になりたいと考えてもいたので、「こんな僕でよかつたら、よろしくお願いします」と、承諾の返事をしたのでした。

この日、こうして、宗像市大島村の皆さんの『口の健康を守るという使命』を担った【大島歯科診療所 院長 小川 智也】の生命が宿ったのです。

「うちに就職しますか？」

翌週の水曜日、二階の院長先生のご自宅で昼食を一緒に緒させて頂いてるときに、院長先生にそのように言わ

れ、そのときの院長先生の嬉しそうな顔は今でもはっきり覚えています。その当時は言葉の通りに受け止めましたが、長い付き合いとなった今、思い返してみると、「一緒に頑張ろうな。」とおっしゃられていたんだなあ、と、あのお誘いを有難く確認致しております。

その後、院長先生から色々な話を聞きました。大島の方々の人柄や暮らしぶり、3年前に大島に仲間と一緒に建てた手作りのログハウスのこと、そして、その大島には歯科医院が無く、困っておいでの方がたくさんいらっしゃるということ、いつの日かこの大島に、【大島歯科医院】を建てることに島の皆さんからも期待を寄せられ、また、そのことが、院長先生の夢でもあったということなど……。

加えて、「医者には、困っている方がいるのなら、そこに医者自らが行くべきなんだ」という加来院長の常日頃の熱き情念を思い浮かべ、私はまさにそのことに共感し、大島歯科診療所の院長として、不安もありながらも、とてつもなく大きな使命感をひしひしと感じていたのです。

宗像市大島は現在人口およそ890人。そのうちの多

くがお年寄りであり、周りは海に囲まれ、漁業・観光が主産業の福岡県内では一番大きな玄界灘に浮かぶ島です。主な特産品はウニ、アワビ、サザエ、それにオレンジ類です。

大島は古代より宗像三女神を祀る『神の島』として、大陸と九州を結ぶ海の架け橋として重要な役割を果たしてきました。宗像三女神の一神・湍津姫神を祀る中津宮があり、宗像市田島の辺津宮、沖ノ島の沖津宮の三宮を称して宗像大社と呼び、日本書紀にもその記述があります。



診療台から眺望できる大島港沿岸
(2007年9月20日・撮影)

そんな宗像市大島は、現在あるいは将来の日本の縮図であるかのような超高齢社会なのです。

その昔、50年ほど前、ここ大島に1年間だけ簡易歯科施設があったそうです。しかしながら、うまくは行かず、それ以降は何十年と歯科医院は無く、無歯科医村となっていました。

そして現在、「歯科医院はコンビニより多い」「歯科医師過剰時代」と言われて久しくなりますが、何十年と歯科医院が無いことで、大変困っている方々が、この大島には実在しているのです。

『それでも、歯科医師は余っている』と、果たして言えるのでしょうか?.....

大島のお年寄りの方や子供たちは以前は船で渡り、島外の歯科医院へ一日がかりで通われていたのです。体力的にそれがかなわなくなると歯科受診を諦め、歯がボロボロになってしまふ方は珍しくありませんでした。

この現状もまた将来の日本の縮図と言えるのかもしれない.....

もちろん船で渡って歯科受診をするなんてことが日本中どこでも起こりうるなどとは言いませんが、一般的に歯科を受診される方は元気に歯科医院に通ってくるのが可能な方々なのです。

これから超高齢社会を迎える日本。歯科に通院が困難な方がどんどん増えてくることでしょう。

『そうです!、やはり、医者は困っていらっしやる人々のもとへ自ら足を運ぶべきなのです。』

ここで、私の経歴を少しだけ紹介致します。私は生まれも育ちも佐賀県佐賀市であります。最近では、島田洋七氏のベストセラー小説「佐賀のがばいばあちゃん」で少しは有名にはなりましたが、あまり特長のない県で、その中でも鳥栖や唐津や武雄、嬉野、有田、伊万里などと比べてこれといった特長のない佐賀市で育ちました。



大島歯科診療所を思い立った加來千里先生を中心に集まった『歯科医師と島民の六人衆』
(2003年9月21日・撮影)

佐賀弁で言うと、「佐賀市は、がばい(すごく) 田舎」です。ただ、たまに実家に帰って思うのは、この何も無い景色があるっていうことが、佐賀市の特長なのかなと。そして、私には、そんな景色がどこか落ち着くし、好きなのかもしれません。その感覚は大島へも通ずるものがあるような気がします。

そんな佐賀市で、すくすくと育ち、佐賀県立佐賀西高等学校(佐賀鍋島藩の藩校・弘道館の流れをくむ旧制佐賀高等学校から佐賀西、佐賀東と、2007年の夏の甲子園を制した佐賀北に分かれる)を卒業し、一年間、北九州市小倉で浪人した後、九州歯科大学へ入学することになったのです。

「何故、歯科医師に?」

と、よく聞かれる質問です。実家の父は歯科医師でもなく普通のサラリーマンです。中学生のころから医師に憧れ、人の役に立ちたい、助けたい、助けた後の「ありがとう」という言葉や笑顔を見聞したりして、「やりがいのある医師」という職に就きたいという思いがありました。

最近、母と話していて、そういえば、そんなこと言っていたなあ……ということが、思い出され、高校生の頃だったと思いますが、「将来、医者になって無医村で働き

たい」と言っていたようです。

無歯科医村である大島で大島歯科診療所の院長として自分が務めるのだと決めたときの使命感、わくわくするような昂揚感は、そんなところから来ていたのかもしれない。

また、私の誕生日が4月18日(418で『良い歯の日』)であったり、ある新聞記事を読んで、歯科医師になるべくしてなったのかなという思いにもなるのです。

……その記事の内容は、1999年当時の佐賀市立日新小学校6年生の『将来の夢』を、ひとりひとりがそこには書いてあり、その中のひとりが『世界で有名な歯医者になりたい』という夢を書いていたのです。その子の名前は小川智也くん。私は1999年当時は23歳になったばかりであり、同姓同名の全くの別人の小川智也くんだったのです。しかも日新小学校は私の母校なのです。

「この朝日を覚えとけ!」

2005年8月18日。大島歯科診療所が誕生する日の早朝、加来歯科の院長先生のログハウスから準備をするために診療所へ向かう途中、それはそれは綺麗な朝日が、まるで開業をお祝いするかのようになり、また、これか

らの私たちの頑張りを期待するかの様に、そして、応援でもするかのように、陽光が降り注いでいました。そのときに院長先生から頂いた言葉です。

あの朝日を今でも思い出します。これから始まるのだという身の引き締まる思い、そして、大島の皆さんたちの生活を照らし続けている朝日の様になりたいという『初心』を思い出しながら……。

そして開業当日を加來先生、牧野先生、加來歯科医院のスタッフの皆さん、そして、大島歯科診療所の優秀なベテラン歯科衛生士である山本領子さんと一緒に迎えることができました。(注3・山本さんは昔、加來先生と同じ歯科のスタディ・グループで活躍され、大島に嫁がれた方です)。

大島歯科診療所は山本さんの存在なしには語れませんが。そして、現在、2006年の4月から自分と同郷、同年齢の歯科衛生士の河野悠さんに新しく仲間として加わってもらっています。河野さんも大島在住の方で、河野さんにも加入してもらったおかげで、僕も山本さんも随分助けられています。この島に二人も歯科衛生士さんが在任されていたことが最高の幸運でした。

開業当初は、新しく来られる患者さんの口の中を診ると、「今までどうやって食事をしてらっしゃったんだろうか」と思われるような状態で、抜歯を行わない週は無いほどでした。

抜歯を行った歯を観察してみると、そのほとんどが以前どこかで治療が行われた歯であり、裏を返せば、歯科医師が手をつけたところは『放っておけば必ず』と言っているほど悪くなる』という事なのです。

これまで歯科医院がなかったのだから仕方の無いことなのかもしれませんが、大島の方々は例えば銀歯を『消費』していらっしやっただと考えられます。しかし、歯科治療において患者さんに『消費』してもらっては困るのです。と申しますか、患者さんも困ると思います。



ある日の診療所の診療風景 (2007年9月20日・撮影)

「消費」していたのでは歯がどんどんどんどん無くなる方向に口の中が進んで行ってしまうのです。

「消費」の反対―「循環」させないといけません。「消費の反対が循環……?、何で……?、「消費の反対は生産」やろうもん」と思われるかと思いますが、歯科においては「消費の反対が循環だ」と思ってください。

何故か?先ほど申しましたように『消費』では歯が無くなってしまいう方向に行ってしまうのです。しかし、『循環』では歯が無くなってしまいうことをくい止めようと時間を稼いでくれるのです。勧進帳の弁慶の様に、とても申しましようか。

虫歯が出来た ↓ 歯医者に行った ↓ 治療が終わった ↓ そのまま放っておいた ↓ また虫歯になった ↓ 歯医者に行ったが手遅れで抜歯になった ↓ 抜いたまま放っていて歯科医院に行かなくなった ↓ 隣の歯が痛くなった・・・これが「消費型」と考えています。

一方、虫歯が出来た ↓ 歯医者に行った ↓ 治療が終わった ↓ 定期検診を治療した歯科医院で受けた ↓ 虫歯にはなっていないけど前回治療した箇所に磨き残しが多いことを歯科衛生士さんに指摘されて磨き方を教えてもらった ↓ 半年後に定期検診を受けた ↓

小さく虫歯になりかけている歯が見つかった ↓ 歯医者さんに診てもらい「これくらいなら削らなくても大丈夫。次の検診までに症状が出るようだったら処置をしましょう」と言ってもらい、安心した。・・・これが「循環型」と考えています。

おわかりいただけますでしょうか?

循環型では定期検診が「間」にある分、最初の虫歯から、次の虫歯が見つかるまで歯科医師が手をだした回数 は1回のみ。患者さんの意識も高い為、「虫歯は進行しないだろう」、という判断から、「手を出さないで様子を見よう……治療は最小限にしよう」と、考えられた結果 ということになります。

もちろん、定期検診を受けさえすれば、ずっと歯が健康な状態でいられるという話にはならず、患者さんご自身の歯の健康、口の健康への意識、歯磨きの回数、時間などと歯科定期検診とが車輪の両輪となって初めてその車輪は生涯を通して自分の歯で健康に食事が出来る方向へと進み、もし問題が生じたとしても早期に見つけることが出来、間違った方向に進んだりすることを防ぎ、あるいは軌道修正をしてくれるのです。

「時間がないけん早くしてくんろ」、「痛いところばどう

にかしてくれ」、そして、「どうもない」となれば来なくなる。
島で生活されていて、島には歯科医院が無いという状



大島で一番好きな景色（2003年8月26日・撮影）

況が長く続いたことを考えれば、『歯医者はずっと終
わらせて、どうもないようになったら行かんでよか』と
いう考えが根付いてしまったのは無理ありません。

『そこを何とかしたい。……何とかして大島の方にも
歯を長持ちさせる為には治療が終わった後のメンテナンス
（定期検診）がとても大事なんだ……大切なんだ』
ということ、分かっていただきたいたいという私の思いが
あり、大島歯科診療所は予防を中心とした【循環型】の
診療体系を作ろうと努めてきました。

しかしながら、初めのころは中々上手くいかず、一カ
月後の検診の話を勧めても「もう、よかよ」と言って予
約は取らずに帰られた方もいれば、治療期間が長くかか
り、ようやく検診期間に入ってもらえるとと思った途端に
来院されなくなる方もいらっしゃいました。

検診の葉書を出しても中々応じてもらえず、頭を抱え
る日々が続いたものでした。

しかし、最近では検診に定期的にに応じてくださる患者
さんが増えつつあります。それは大変嬉しくもあり、素
晴らしいことであります。でも、やはり思うのは、人に
伝え、人を動かすということは、自分の不器用な性格も
あいまって大変なエネルギーが必要だなとつくづく今も

感じています。

「それが、どんなに自分にとつて良いことである」と、人から説明を受けたとしても、その方の生活観に当てはまらなければ決して行動には移さないだろうし、長続きもしないでしょう。

「病氣じゃなく人を見ろ！」

「生活の中にか病氣はないんだ！」

と、加來齒科の院長先生に口をすっぱくして何度も何度も言われ続けてきたことです。

患者さんには、家族がいたり、人付き合いがあつたり、仕事があつたり、趣味があつたり、笑つたり、泣いたり、怒つたり、落ち込んだり、楽しかったり、恋人と喧嘩したり、試験に受かつたり、契約がまとまつたり、学校の先生に褒められたり、大漁だつたり：：、と、いろんな暮らしがあつて、生活があつて、その中のほんの一部分に歯医者に通うということが割かれるわけで、決して「○○さんの虫歯を診る」という姿勢ではないけない。

「虫歯の○○さんを診る」という姿勢でいなければいけないんだ・・・と、いくら正しいことや「情報」をこちらが与えても、患者さんに響かなければ、それはただの「おしつけ」になつてしまいます。

口の中だけを見て、「こうした方が良い。こうしなけ

ればいけません。お金、時間は当然かかります。」では、国民の方を見ずに、「国民の生活が大事。だから、こうしましょう」と、のたまわれる政治家の先生方となんら変わらないと思うのです。政治家の先生ご自身も『国民』という意味で「国民の生活が大事」ということなら、わからなくはないのですが、選挙に受かりたいのではありません：：：。

そこで、患者さんと向き合い、話し合い、『交流』して、：：：患者さんにとつて無理なく納得のいくことは何なのかを、『情報』を提供しながら一緒に考えていきましょう：：：という姿勢が大切だと考えます。

「夏場からお客さんが来るけん夏場は来れんけどよか？」という旅館のおばあちゃんは、下の歯もかなり悪いのですが、上の歯を夏場までに治して、下の歯は話し合つて、一ヶ月ごとに洗浄に来てもらうことにしました。

年齢90歳を超えられて元気な、元大島の小学校の先生をされておられたお爺さんは、抜歯になつてもおかしくない歯があります。話し合つて今は一ヶ月毎に来ていただいています。そろそろ寒い時期なので、問題がなけ

れば、暖かくなってから来ていただくかとも考えてますが……。

それまでの自分は口の中の状態、歯の状態など「形態的」なことにばかりに目が行きがちで、「こういう状態だからこういう処置をしなければいけない。この診断で正しいだろうか。自分の実力で対応可能だろうか。」と、ひとりで思い悩んでいました。

島の方々から大島の歯医者者が時間がかかるという評価もいただきます。その評価のひとつの原因はそういう点にあったのかもしれない。でも、思ったのです。義歯にしても『機能』させるのは患者さんご自身じゃないかと……。

そう考えると、「なんだ患者さんと一緒に考えればいいんだ」と思え、随分気が楽になったものです。すり減った靴の踵のように、屋根を支える柱の様に……：『形（形態）は機能に従うのかな』と……。

島の歯科医師として、いままでの4年間、色々な方々に関わり、そして、これからも関わろうと考えるとき、もうひとつ、自分が強くこれからも思い続けるであろう

ことがあります。

それは、

歯医者者は歯を診るのならば口（口腔）を診るべきだし、嘔むことを診るのなら飲み込むこと（嚥下）までを診るべきなのではないだろうかというこ

とです。

これから先、日本は超高齢社会を迎えます。そうすると当然、何らかの全身疾患を有した方が増え、病院へ入院する方も増えてくることでしょう。最近では総合病院などでも口腔ケア（注・自分自身では十分に口の中の清掃を行えない方に対して清掃を介護者の方が行うこと）



牧野先生とインプラントごっこ
(2007年9月18日・撮影)

を熱心に取り組まれるところも増えつつあるようですが、もし入院した先が口腔ケアを軽視するような病院であったとすると、倒れてすぐの急性期から回復期にかけて口を使わない、口に刺激が行かないことが災いとなり口腔機能が低下し、飲み込むことも困難となり、飲み込んだものが食道ではなく気管のほうに流れてしまったりする誤嚥性肺炎を起こしやすくなるのです。

先ほど述べましたように、最近は総合病院などでも口腔ケアに取り組む姿勢が変わりつつあるようです。NST（栄養サポートチーム）といって患者さんの栄養状態を様々な職種が力を合わせて管理し、低栄養状態に陥ることを防ごうとするチーム医療が病院で取り組まれています。

歯科医師や歯科衛生士は、口から食べることにより栄養摂取率を高く維持することを支えるという役割を担います。日本の総合病院の中の歯科（歯科口腔外科）は減りつつあるのが現状ですが、先日、福岡県内のある総合病院の中の歯科の先生とお話しする機会があり、このようなお話を聞かせていただきました。

入院中の患者さんは嚥下なども含めて診ることが出来るのだけれど、在宅に帰られてから嚥下を診られる医者がない。そこで期待される職種が地域の歯科医師であ

り、地域全体でNST（栄養サポートチーム）を行いたい、行うべきなんだということでした。私も全く同感です。

大島には寝たきりの方はいらっしやいません。なぜか？それは重症度が高くなると島外に出られるからです。

しかし、これから先、島外の病院から大島の自宅へ戻られる方が出てくることを期待します。

そのときに、入院していた病院と連携を取り、誤嚥を起こしたりしていないか、口から食事が取れる状態なのか、それとも経管栄養と併用して、お楽しみ程度に口から食べるべきなのか、より安全に食事するための食物の形態は退院後のままの方が良いのか、普通食も十分食べられる状態なのかを評価出来る医師になることが、ここ大島の歯科医師である自分の使命だと感じます。

勿論、大島歯科診療所だけでは限界があります。大島には総合病院のような多彩な職種はそろっていません。しかし、大島診療所があり、ふれあいセンターというデイサービスがあります。そして何より患者さんのご家族がいます。その大島の皆さんと協力し合い、話し合っ情報を出し合うなかで、大島の高齢者の方々が少しでも

長く安全に安心して大島で生き活きと生き抜いていただけるよう努めるのが、宗像市大島・大島歯科診療所で島の「生活の医学」に携わる歯科医師・小川智也の当面の目標であります。

そして、ここ福岡県宗像市大島の大島歯科診療所から様々なことを発信出来、無菌科医村が無くなり、病院歯科が増設される病院が増え、歯科に困られる方がいなくなる日が来ることを願って止みません。

今回、このような機会を与えて頂きました加來宣幸先生と加來千里先生に感謝致しております。

(完)

(宗像市大島・大島歯科診療所医院長)

